高専（英語）教育への「要求」とは何か

原口　治

本発表の表題にある「要求」とは、産業界や社会他からの高専に対する「外からの要求」（飯吉弘子 『戦後日本産業界の大学教育要求―経済団体の教育言説と現代の教養論』）を主に指しています。高専教育の学びと教えの当事者である教員と学生のインタヴを紹介し、この「外からの要求」に彼らがどう向き合い、苦悩し、そして打開してきたか、について考察を行うことが発表の主眼です。さらに、高専創設の経緯にも触れ、今後の高専（英語）教育の研究に、ナラティヴという研究手法が有益であることも主張します。

まず、学科専門教員として長年の勤務経験を有し、定年退職した元高専教員のインタヴを取り上げます。高専教育への「外からの要求」の一つとして、この高専元教員の専攻科設置をめぐる語りを考察します。

中堅技術者早期育成の目玉ともいうべき中卒後 5 年一貫の高専教育制度は、大学より 2 年間修業年限の短いことがその利点のはずでしたが、高専卒業者を対象に高専卒業後 2 年間の課程、専攻科が 1992 年から順次、全国の高専に設置されることになります。この専攻科認可時の教員審査、具体的には博士号取得の必要に迫られた状況のインタヴが以下となります。**「（博士号取得者数の）明文化はなかったと思います。ただ、（校内の）設置委員会で出てきたのは、専攻ごとに半数以上、ドクターは要るだろう」**（インタヴ対象者の言葉は下線強調で以下同じ）。ここでは、それまで高専教員があまり経験していなかった「外からの要求」に直面した困惑が読み取れます。具体的には博士号取得者の一定数確保のために、当時の高専教員の教育研究活動環境が激変したのでした。高専創設期の国内各地での高専誘致期成同盟会の熱心な活動に見られるように、地域性を特色とするはずの高専が、国内他高専の動向を注視しつつ「外からの要求」、それも明文化されていないものに応えざるを得ない難しい状況が、このインタヴの言葉には端的に表れています。

専攻科設置と同時期、2000 年を過ぎると、高専教育制度に対する「外からの要求／期待の声」は一層高まっていきます。とりわけ教育の質の保証化と国際化への「外からの要求」の声に真摯に応えるべく、多くの高専が、複数の外部評価審査に同時に取り組む状況となります。そこでくっきりと焦点の当たってくるのが、国際コミュニケーション（英語）能力測定の有力な指標と名高い TOEIC®の劇的な地位向上なのです。

先の元高専教員は、JABEE や認証評価等の外部評価審査における TOEIC 導入の経緯を次のように回想しています。**「国際的なコミュニケーションを英語でできるレベルっていうのが、どっかが 400 点って言ってくれれば楽だったんですけど、それはない」**。**「結局 TOEIC でって（導入になった）。『それ、何で、ですか』って聞いても（於外部評価審査説明会）、いや、その答え、僕、もらえなかったと思うんです」**。最初に触れた専攻科設置の博士号取得必要性の事例との類似が見られる点で、この声は非常に重要です。国際コミュニケーション能力の具体的証明（エヴィデンス）を前例なく求められ、外部評価審査機関や他高専の動向を探りつつ、TOEIC 導入に縋る状況―ここには高専英語教育改善への「外からの強烈な要求」が窺えます。

次に高専英語教育に携わる学習者と教員の声を辿ります。彼らへのインタヴの主要な拠り所は、「英語、が使えない／に弱い、高専生」という産業界や社会に根強い言説、すなわち「外からの要求」の検証です。

『高専教育の発見』で、矢野眞和らは高専卒業生アンケート調査を実施し、「（高専生は）人文社会系に弱く、 英語力は絶対的に不足」との見出しの一節(130-1)で、「現状の高専英語教育に卒業生は満足していない、・・・これは教育課程だけの問題ではなく、・・・在学時には技術者にとって英語の重要性がわからなかったという面もある」と指摘します。この主張を踏まえ、次に高専学生 2 名のインタヴを取り上げます。

１人目の高専学生は自身の言語観を記号接地の概念に触れつつ説明します。**「記号接地できてるんだったら、一瞬でできるはずの問題が、記号接地してないから解けてない」**。ここでこの学生は、太陽という言葉＝記号を、もっぱら記号のレヴェルで処理し、熱いとかまぶしいという感覚と結びつけることができない例を出しながら、AI の未解決領域である記号接地（Symbol grounding）問題に絡めて英語教育を語ります。そして記号接地の話に連動する形で、学生の話題は三島由紀夫へと移っています。**「三島由紀夫の美しい日本語」**に魅了された経験を語る中で、以下の言葉が続きます。**「日本語の『使い方』というよりは、溢れ出る教養や思慮深さに魅了された」**、さらには、**「三島由紀夫らの論争にも愛国心というか、日本を良くしたいという強い想いを感じました」**や、**「右翼 vs 左翼の構図でしたが、思想の根本は同じで手段が違うだけな気がしました。お互いにリスペクトしあって建設的な議論をしようとする姿勢が素晴らしかったです」**、とも語っています。この高専生が三島に魅了された一因を推測してみます。高専という教育環境、特に学寮生として、この学生が大切にする記号接地の世界、すなわち実体験、感覚に基づく概念が、まさに三島の

「溢れ出る教養」や「思慮深さ」と合致していたのではないでしょうか。だからこそ三島の語りは彼にとり、記号が記号でしかないという「日本語の使い方」だけのレヴェルでは終わっていないのです。そうなると、学習者を魅了するような英語の教材や教授法とは、いわば記号接地ができていなければならないはずです。工学系の素材による英語教材であっても、高専英語学習者の感覚や実際の現実と結びついていない教材や教授方法は、結局のところ高専生の興味関心を引きつけられないのです。その吟味を「自分で行ないたい」、とこの学生は語り、そのためには「英語の基礎がなっていないといけない」との気づきが後に出てきます。

この高専生が語る「英語の基礎」は、２人目のインタヴ学生の視点と重なっています。2 人目のインタヴ学生は大学編入学志望の学寮生ですが、高校の同級生との会話から、「外からの要求」に疎い高専英語教育の問題点を指摘します。「TOEIC を取り組む前の段階が少し物足りない・・・普通の（文法力等の基礎力）なっていうふうに、高専の教育っていうか英語の授業はすごくそう思いますね。高校生と高専生の違いって、そもそもが頭の中にある英語の単語数が全然違うなっていうふうに感じてまして、・・・システム単語帳っていう物をめちゃめちゃ回してるんで、これをやってると、高専生は勝てないなってすごく思ってしまいます」。「文法とかは全部一緒なんじゃないかなっていうふうに。そうしたら、わざわざ高専生には難しいからっていうふうに下げるんじゃなくて一緒にしてしまってもいいんじゃないのかなっていう、僕は高専生だからっていうふうな分け方をする必要はないのかなっていうふうに、英語教育は思います」。

この現状認識は、高専学生だけでなく高専英語教員にも共通しています。TOEIC への現実的な対応をする高専英語教員は、高専生が修得すべき英語力のありかたに対する複雑な思いを次のように吐露します。「今は学生自身が TOEIC ってのは必要だというようなモチベーションが（あります）。今の形だと、・・・意味はあるかなと科目って言いますか、一つの tool としては。ただ単にパスするだけだったら TOEIC でいいんですけれども、それだけじゃなくて・・・。もう少し地道な解釈力とか読解力っていうのも必要だなというのが、もう一つの考え方なのと」。別の例として、中学高校教員経験者である高専英語教員へのインタヴからも、同様の苦悩や疑問が読み取れます。「中学校から入ってきた子たちなので、どんなに高いといっても、やっぱり中学生のレベルからのスタートだと思うので。この三つ、TOEIC をやらなきゃいけないし、技術英語を少しやってあげたいなという気持ちもありますし、もう少し高校でやるようなこともやってあげたいなって。だけど、授業は、われわれは低学年ですと週 2 回（1 コマ 90 分講義）ですよね」。これら二人の高専英語教員の声からは、「外からの要求」に折り合いをつけつつも高専英語教育の独自性の確立に苦心する真摯な姿勢が窺えます。自らの教授する教室の学生を思いながらの彼ら高専教員の語りには、間接的な英語教育批判、言い換えれば現状に疎い単なる「外からの要求」の類とは、明らかに相違があります。

高専関係者自身による声の発信例としては全国高専英語教育学会(COCET)の活動が顕著です。同主催の「全国高専英語プレゼンテーションコンテスト」の大会ポスターには、赤字で「英語が使える高専生」とあります。これは先に触れた「英語が使えない／に弱い高専生」というイメージを強く意識したものでしょう。

本発表のまとめとして、高専という教育制度そのものを生み出した「外の要求」について考察します。

吉見俊哉は『大学は何処へ―未来への設計』(2021)の「高専という『回路』」と名付けた一節で、「高専とは我が国高度経済成長期の産業界の要求により、技術立国日本の中核を支えるべく成立し、その教育制度は実践的かつ優秀な中堅技術者を大学より 2 年も早く世に送り出す当時として画期的なものであった」、と高専創設時の社会背景について明確にすっきりとまとめています。これは高専創設の「定説」といえます。

ところが、この定説の再考を促す研究成果が近年公刊されています。高専教員の在職経験を有する手嶋泰伸は、論文「中央教育審議会からみた高等専門学校制度の成立過程」(2018)において、先に示した吉見による「明確ですっきりとした」説明ではとらえきれない、多様な「外の要求」の声に光を当てています。「文部省は・・・高専制度の創設によって　産業界の要請に配慮をみせつつも、・・・科学技術教育を大学を頂点とした新制教育のピラミッドの中で実施しようとしていたのである。高専制度は戦後の産業振興というポジティブな文脈の中でではなく、いわば戦後の新制大学制度の防波堤として成立したのであったのだ」。手嶋のこの主張で注目すべきは、当時の複雑な政治社会状況下で、「外の要求」を満たす教育制度として高専が成立したという点です。そしてこの多義性／曖昧性こそが、高専教育当事者の学生や教員に「外からの要求／期待の声」を強く意識させ、「高専(“KOSEN”)の独自性／アイデンティティの模索」に駆り立てる要因になっているのではないでしょうか。そうなると、高専英語教育も当然ながらその影響を大いに受けていることになります。だからこそ、それら「外の要求」の妥当性の判断や適切な対処法を見出すため、延いては高専教育発展のために、学生や卒業生そして教員相互の共同作業（インタヴそしてナラティヴの構築）は、非常に重要なものとなってきます。この作業から高専英語教育に携わる「学びと教えの当事者」達は、自らの立ち位置を再確認でき、高専（英語）教育研究の新たな視座を得られるのだ、と発表者は考えます。